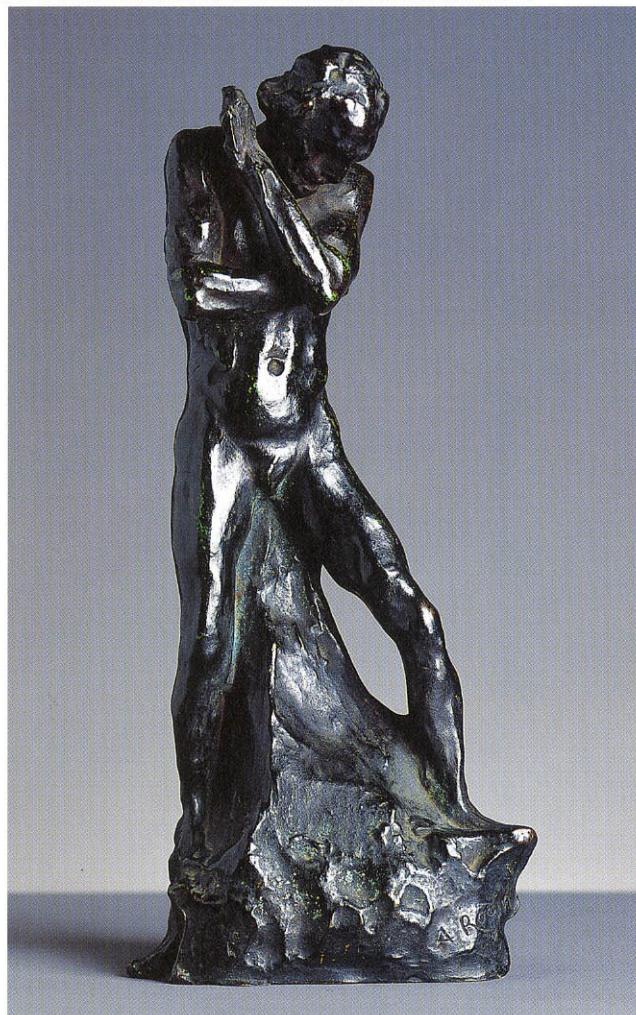


もっと知りたい

武者小路実篤

『ロダン、が来た!』



ロダン「ある小さき影」1885年
現在は公益財団法人 大原美術館所蔵(白樺美術館より永久寄託)

白樺美術館を作ろう!

実篤らは考えました。〔その具体的な方法や結末については、「もっと知りたい38・39」参照。〕

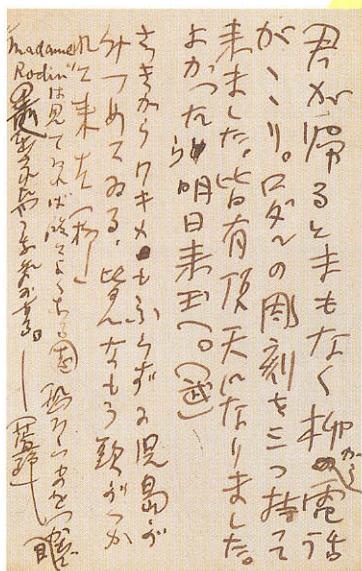
むちゅう
夢中になった芸術家 1

ロダン

しらかば
～白樺美術館物語・1～

実篤らが雑誌『白樺』を始めた明治43(1910)年当時、一般の人が西洋美術の本物を見る機会は、ほとんどありませんでした。高校時代までに、学習院で充実した美術教育を受けてきた白樺派の作家たちは、画集や複製画で西洋美術に親しんでいましたが、「本物」に触れる感動を彼らに呼び起こしたある出来事とは…?

明治44年、ロダンから白樺派の作家たちに、3つのブロンズ作品「ある小さき影」「ロダン夫人の胸像」「巴里ゴロツキの首」が贈られました。(そのいきさつについては、裏面) (p.39)



やまわき
実篤らから、友人の山脇あてハガキ
明治44(1911)年12月22日

うちょうてん 「有頂天」「ワキメもふら
ずにみつめている」など
と、ロダンの本物を目の
当たりにした感動を口ぐ
ちに書き送っています。

じょよぢら めす
彪像が盗まれたり、地震で
こわ
壊れたりしたら困るからと、
外食のときにも持ち歩いた
ほどでした。



「本物」から得られるこの感動を、美術館を作って多くの人と共有したいと



『白樺』ロダン号表紙 明治43(1910)年11月

ロダンの「小さなスフィンクス」をモデルにした実篤のデッサン 大正14(1925)年▶
モデルの彫像は、数ある実篤の美術品コレクションの中でも大正9(1920)年と、ごく早いうちに手に入れられ、晩年まで身近に置かれて、くりかえしスケッチされた。



実篤記念館でお気に入りの作品を見つけて、描いてみよう！
そして、なぜ気に入ったのかも考えてみよう！



こんな人

オーギュスト・ロダン (1840~1917年)

人間の内面や葛藤を表現する作風で、近代彫刻の父と称されるフランスの彫刻家。
「地獄の門」「考える人」などで知られる。